

●ダン・リップル〜バッハとモンゴメリーからの影響〜

ギタリストとして、独奏者であり、アンサンブルプレイヤーであって、レコーディング・アーティストでもあるダン・リップルは、グラモフォン、アメリカンレコードガイド及びギターレヴューから絶賛を博している。デイヴィッド・スタロピンに師事してマンハッタン音楽院で博士号を取得しているが、コンテンポラリー室内楽団ICE（国際コンテンポラリーアンサンブル）とフレキシブル・ミュージックのメンバーでもある。同時にインディーロックバンドのマイス・パレードとツアーもしている。既に実績のある作曲家だけではなく新進気鋭の作曲家に対して50曲以上のソロと室内楽作品を委嘱し、それを世界初演しているが、その多くを彼が所有する独立レーベルであるニュー・フォーカス・レコーディングで録音している。これまで彼が師事したギタリストは、ジェイソン・ヴェー、ジョン・ホルムキスト、デイヴィッド・ライズナー、スティーブン・アーロン、ニコラス・ゴールズ。加えて夏期講習で指導を受けたリカルド・イスナオラとシャロン・イスピンがいる。

リップルが11歳でギターを始めたと思ったのは、ジミー・ペイジの解散後のレッド・ツェッペリンレコード〈Outrider〉の歌をラジオで聴いたのがきっかけだった。

「私の初期の訓練は、アメリカの多くのギタリストと同じです。クラシック・ロック・ソングから和声を学び、ツェッペリンとヘンドリックスの曲から独奏を

学びました。私の音楽人生で、変化を求められた瞬間は二度ありますが、一度は先生からバッハの〈主人の望みの喜びよ〉の編曲譜を与えられたとき、もう1つはウェス・モンゴメリー〈フルハウス〉の編曲譜を与えられた時です。この2曲がクラシックギターとジャズ・ギターの双方に私を夢中にさせたきっかけです」とリップルは語った。

「私は可能な限り音楽のカメレオンになりました。何をすれば自分が音楽的にユニークなスタイルになれるのかを考えました。そして音楽家として自分に忠実な演奏をしながら、自分自身の声を演奏に反映させることに集中しました。音楽は、それを作り、演奏する人が誰であるかを表現するものです。ですから、美しくして表情豊かな音へのアプローチの仕方には、いろいろな道が開かれています。同じように、見方や聴き方も、いろいろあってすべての人に対して自由です。

つまり音楽という仕事は、「私はクラシックの音楽家である」とか、「ジャズのミュージシャンである」と強制的に言わせられるような職業なのです。私の場合、職業としては第一義的にクラシックの音楽家ですが、ジャンルの境界がほとんど機能しないような傾向にあり、時折、演奏するのに非常に難しい音符で知られているICEのようなグループと即興演奏をしたり、ロックバンドのマイス・パレードのような楽譜に縛られて、ほとんど即興演奏をする余地がないような演奏をすることもあります」

リップルは、バッハを愛し、現代の室内楽のレパートリーを武満からエリオット・カーターやマリオ・ダヴィドウスキーに至るまで深く愛している。彼はロバート・ラックのスブルーストップの1998年製のギターを所有し、アンサンブルではピエゾ・ピックアップ付のリチャード・ブルーネのモデル20を使用している。

「現代音楽では、作曲家がエレクトリックギターを積極的に使うので、最近では、私の室内楽演奏もエレクトリックです」とリップルは語った。「私は、フェンダー・ストラトキャスター同様に、クリス・フォーシェイジに注文して作らせた、クラシックギター仕様で広いネックがついて、ボディが半ば中空のエレクトリックギターを持っています。ジャ

ズを演奏する時はブルーネのギターとフォーシェイジのギターを交互に使用しています。私がロックバンドのツアーに同行する時は、ナイロン弦を使用するエレクトリックギターのゴダン・マルティアック・クラシック・ナイロン・ストリング・ギターを使っています。このギターはクラシックギターのような感触で、ステージでのハウリングがまったくありません」

●ICEでの活動、ロックバンドで世界各地をツアー

リップルはICEとの仕事について「このグループは現在活躍中の作曲家によって作曲された現代室内楽作品を演奏していますが、メンバーの数は30人と多く、演奏曲目による使用楽器に応じて、コンサートごとに演奏者を交代させています。我々はこれまでマグナス・リンドバグ、カイジャ・サーリアホ、ハンス・ウエルナー・ヘンツェ、マリオ・ダヴィドフスキーの作品を演奏してきましたが、最近目立って活躍しているデュー・ユン、エドガー・グスマン、ダイ・フジクラ、ネーサン・デイヴィスなどの作品も演奏しています」

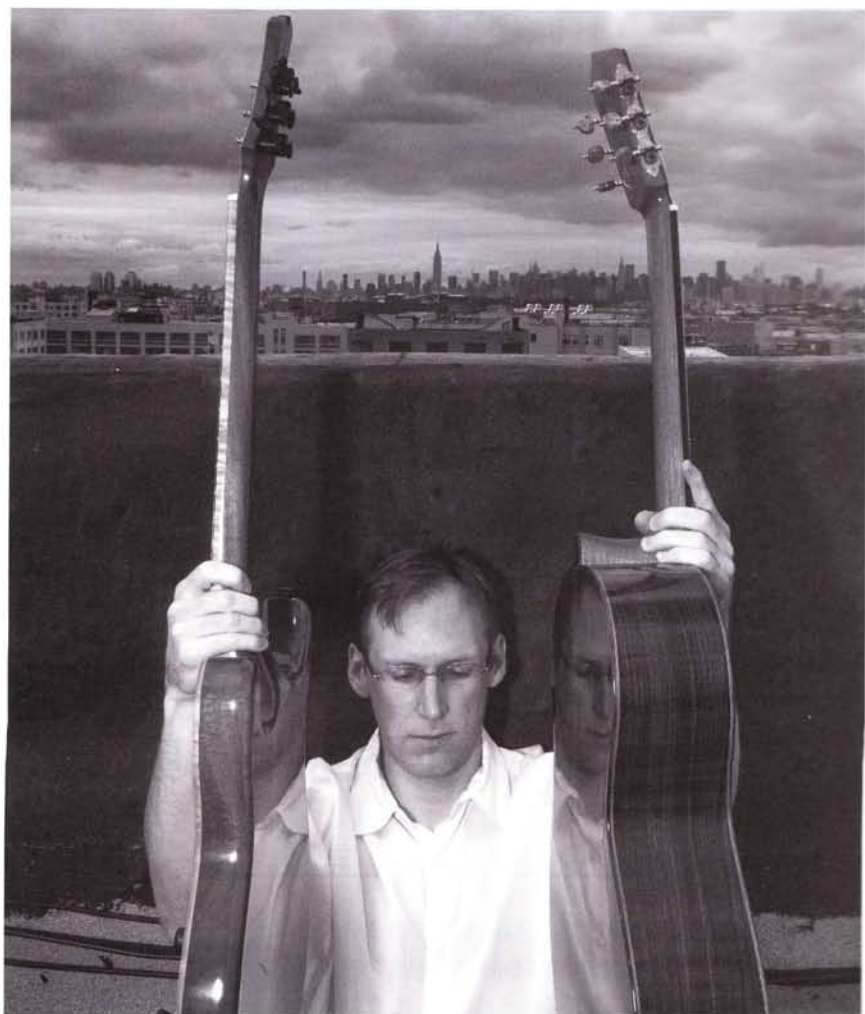
「ロンドン在住の日本人作曲家ダイ・フジクラ作曲の〈Abandoned Time〉という表題のCDを、私のレーベルであるニューフォーカス・レコーディングからリリースしました。この曲はピアノ、クラリネット、ヴァイオリン、チェロ、打楽器など10人の編成とエレクトリックギターのためのミニコンチェルトです。ダイは〈ICE〉というタイトルのギターアンサンブルのための作品をICEのために書いていますが、私のために〈alone speak〉というエレクトリックギターのための独奏曲を書いてくれています。この作品はイボウ（ebow）とループペダルを使ってギターからオーケストラのような音を作り出しています」

リップルは、2004年以来英国のブライトンにあるファット・キャットレコードで録音しているインディーロックバンドのマイス・パレードに加わって演奏活動をしている。西アフリカのそしてフラメンコとブラジル音楽、強力なロックドラムに織り込まれており、ヴォーカルとヴィブラフォンとキーボードをフィーチャーしている。

「我々は、これまで6年以上にわたって北米、ヨーロッパ、日本、オーストラリア、そしてアイスランドをツアーしてきました」とリッペルは語った。「演奏会場も、フロリダ州のジャクソンビルのダイブ・バーに始まり、大きな国際フェスティバルに至るまで広範囲に及んでいます。楽しみの1つは、良きにつけ、悪しきにつけ自分が演奏している場所の多様さに常に驚くことです。日本ツアーはいつも素晴らしい経験です。私が訪問した国の中で、最高のもてなしをしてくれた国は日本であることは間違いありません。日本の聴衆は素晴らしく、注意深く聴いてくれて、信じられないくらい熱心で、楽しい。日本が素晴らしい謎の国であって、都会的な若者の文化が早いペースで進化し、技術に裏打ちされてエネルギーが豊富だが、伝統文化は落ち着いていて、静観的で、精神的であることに気がきました。私は、訪問するたびに、この国が大好きになります。そして食事が素晴らしい」。このバンドは数年前にフジロック・フェスティバルで演奏し、渋谷のO-East、O-West、O-Nestに加えて大阪、名古屋、京都などの都市で演奏した。2010年にリリースされた彼らの新しいアルバムは、2010年9月と10月に北米東海岸、イギリス、ヨーロッパへのツアーへと続き、さらに2011年1月には北米西海岸と日本へのツアーとなる。

●クラシックの演奏家としてのCD制作とコンサート活動

リッペルは現在2枚のCDをリリースするために編集中で「最初の1枚は2枚目のバッハのソロアルバムで、〈リュート組曲第3番〉と私が編曲した〈無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第1番・ロ短調 BWV1002〉が入っています。同時に、目下進行中のシューベルト全集のCDがありますが、これはバーナード・クレッセが製作した19世紀のシュタウファー・ギターの素晴らしいレプリカを使った録音によって、メルツ編曲のシューベルト・リート6曲に加え、歌とギターのための〈リート〉数曲が含まれています。最近のコンテンポラリーミュージックのプロジェクトの後は、伝統的なレパートリーにもっと時間を割きたかったのです」



「私のレーベルであるニュー・フォーカス・レコーディングは、第一義的には現代音楽のレーベルではあるけれども、それに限定しているわけではなくて、人に楽しみを与えるようなフルート奏者のクレアー・チェイス、ピアニストのジャイコブ・グリーンバーク、作曲家のピーター・ギルバートによる録音も制作しています。プロデューサーとしての仕事は極めて自由であることに気がついたので、今後は、誰か違った芸術的ヴィジョンの持ち主とのコラボレーションにより、彼らの音楽を伝える最も効果的な手段をフィードバックしたいと思っています」

「ニューヨークにいるギタリストは、皆それぞれに市内の膨大な数のタレントに曝されています。ニューヨークというところは、緊張度の高い競争の激しいところだから、自分の前途を守らなければならないが、同時に鼓舞される場所でもあります。米国の演奏家は、良い演奏ができたコンサートの後では（それほど

の出来ではなかった時でさえ）聴衆が集まってきて、お祝いを言ってくれることを期待するものです。ドイツで数年前に、私が1週間ソロコンサートを行なったとき、私を招聘してくれた友人に「私がいい演奏をしたのに何故誰もお礼も、お祝いの言葉の言ってくれないのか？」と尋ねたことがある。すると「彼らの沈黙はあなたの演奏を認めたという意味なのだ」というのが彼の答えでした。もし彼らが気に入らなかつたら、すぐ反応が開けたのかもしれない。海外では、あなたはミュージシャンなのだから、当然良い演奏をするものだという感覚があります。「これがあなたの仕事なのであって、仕事をしただけのあなたにお祝いの言葉を述べる必要があると思っっている人などいない」と言われました。私はこの言葉から新たな活力を見出しました。何故なら、演奏家として完璧な演奏をすることよりも、音楽それ自身に全力を注ぐべきなのだと悟ったからです」